

# 学生相談機関の名称と被援助志向性との関連について

木村 真人\*

## The Relationship between Names of Student Counseling Institution and Help-Seeking Preferences

Masato KIMURA

### Abstract

The main purpose of the present study was to investigate the relationship between names of student counseling institution and help-seeking preferences to them. 142 university students were requested to rank order the following three student counseling institution's names in terms of the likelihood that they would go to that place for help: Student Counseling Center; Counseling Room; Health Service Center. The results showed that; 1) As for academic problem areas, career problem areas and daily life problem areas, students prefer to Student Counseling Center, 2) As for psychological and social problem areas, students prefer to Counseling Room, 3) As for health problem areas, students prefer to Health Service Center. These results suggested the importance of the student counseling institution's name in the help-seeking preferences.

Key words : help-seeking preference, student counseling, name of student counseling institution.

### 問題と目的

学生相談機関の名称はどのように命名されるのか。

日本学生相談学会特別委員会の2000年度の調査によれば、全国の大学・短期大学・高等専門学校で学生相談機関の67%が「学生相談室」という名称を用いており、ついで「保健管理セン

ター」(7%)、「カウンセリング・ルーム」(7%)であり(日本学生相談学会特別委員会、2001)、学生相談機関の名称として『学生相談室』が主流となっているといえる。一方で、学生相談活動の発展とともに相談機関の機能の変化や提供する援助サービスが多様化する中で、その機能や提供するサービスを反映した独自の相談機関の名称をつけているところもある。

---

\*Masato KIMURA 福祉心理学科 (Department of Social Work and Psychology)

では、相談機関を利用する側の学生は、このような学生相談機関の名称をどのように捉えているのか。Sieveking & Chappel (1970) は、大学生367名を対象に大学生に共通して認められる30項目の問題を提示し、カウンセリング・センター (Counseling Center) とサイコロジカル・センター (Psychological Center) のどちらを利用するのが適切であるか回答を求めた。その結果、カウンセリング・センターは職業選択や学習の技能などに関する成長的・発達促進的な問題の場合に利用するのが適切であると捉えられているのに対し、サイコロジカル・センターでは劣等感やうつなどより深刻な問題の場合に利用するのが適切であると捉えられていたと報告している。Brown & Chambers (1986) は大学生296名を対象に、個人的・情緒的問題とキャリアに関する問題の両方を抱えた場面を想定し、4つの相談機関名 (a. Personal and Career Counseling Service, b. Psychological and Career, and Counseling Service, c. Counseling, Career, and Consultation Service, d. Psychological and Career Exploration Service) を提示して相談したい順に順位の回答を求めた。その結果、Psychological and Career, and Counseling Service の順位が他の相談機関に比べてもっとも高く、また、大学生の60%がサービスを利用するのに相談機関の名称が重要であると答えたと報告している。

このように学生相談機関の名称により、利用する側の学生が相談するに適切であると捉える問題や悩みが異なるのであれば、学生相談機関の名称はサービスの利用を規定するひとつの要因となると考えられ、重要な意味を持つといえよう。したがって、学生相談機関の命名には慎重になる必要があるといえる。Kohlan (1973) も指摘しているように、相談機関の名称については実証的な研究結果に基づく命名が望まれる。

そこで、本研究では大学生がどのような問題を抱えたときに学生相談機関を利用しようと思うのかという被援助志向性について、学生相談機関の3つの名称を取り上げ比較することを目的とする。

被援助志向性とは、水野・石隈 (1999) により、「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」と定義されている。学生相談活動をサービスとして捉えた場合、よりよいサービスを提供するためには、サービスを利用する側の視点に立つことが重要であるといえる。そのためには、より効果的な援助サービスの開発とともに、サービスの利用者である学生が学生相談活動をどのように捉えているのか、また学生が援助サービスをどのように求め、利用するのかという被援助志向性に注目することが必要であるといえる。つまり、いくら効果的な援助サービスを開発したとしても、そのサービスが利用されなければ意味がない。サービスを利用しやすくするためには、学生相談機関の名称に対する学生相談機関側の認識と、利用者である学生側の認識との間にギャップがあるのであれば、そのギャップを埋めることが望まれる。さらに、学生相談機関の名称と被援助志向性との関連を明らかにすることで、学生相談機関のサービスを利用する側である学生の学生相談機関に対する意識やニーズを反映した、実証に基づいた学生相談機関の命名につながると思われる。

## 方 法

### 予備調査

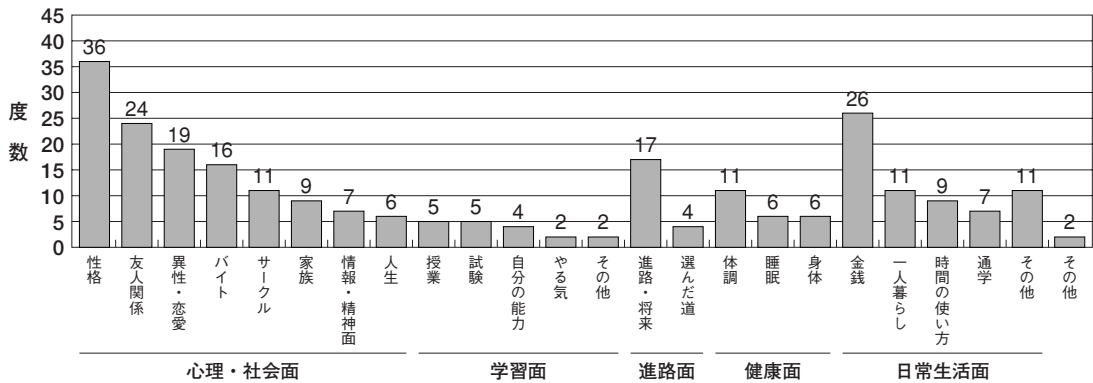


Figure 1 大学生の悩みの分類と度数

本調査で使用する大学生が抱える問題の項目を作成するために、予備調査として、大学生76名を対象に現在抱える悩みについて自由記述形式で回答を求めた。得られた回答は、学校心理学における「学習」、「心理・社会」、「進路」、「健康」という分類（石隈，1999）を参考に、心理学研究者2名の話し合いにより分類された。その結果、上記の4領域のほかに、「日常生活」に関する悩みの領域が認められた。そこで、大学生が抱える問題領域として、「心理・社会面」、「学習面」、「進路面」、「健康面」、「日常生活面」の5領域を設定した。各問題領域と悩みの度数は Figure 1の通りである。そして、各問題領域で度数の高かった全17項目を大学生の抱える問題の項目とした（Table 1）。

### 本調査の概要

関東圏の4年制私立大学の学生187名を対象に、2003年12月に大学の講義の時間を利用して、集団形式で質問紙調査が実施された。記入漏れのある回答票を除いた142名（男性59名、女性83名）が分析対象となった。平均年齢は19.84歳（SD=1.53）であった。

### 質問紙の構成

大学生の学生相談機関への被援助志向性を測

定するために、3つの相談機関の名称を取り上げ、予備調査で得られた5領域、17項目の問題（Table 1）について、「自分で解決できない場合、どの相談機関を利用しようと思いますか」とたずね、相談したい順に1～3の順位の記入を求めた。本研究で取り上げた相談機関の名称は、日本学生相談学会特別委員会（2000）の調査より学生相談機関の名称として多かった上位3つの『学生相談室』、『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』であった。順位が高いほど被援助志向性が高いことを示す。

### 結果

問題領域・問題項目別の各学生相談機関への被援助志向性の平均順位は Table 1のとおりであった。3つの学生相談機関の名称に対する被援助志向性の順位の違いを検討するため、フリードマンの検定を実施した。また、多重比較にはボンフェローニの方法を用いた（Table 1）。

#### 「心理・社会面」について

分析の結果、学生相談機関の名称の間で被援助志向性の平均順位に有意な差が認められた。多重比較の結果、「自分の性格」、「友人関係」、「異性・恋愛」、「家族」に関する問題では、「カ

Table 1 各相談機関への被援助志向性の平均順位とその差

	a	b	c	$\chi^2$ 値 (df=2)	多重比較
	学生 相談室	カ ウン セ リ ン グ ・ ル ーム	保 健 管 理 セ ン タ ー		
<心理・社会面>					
自分の性格に関すること	2.02	1.19	2.78	179.50**	c>a>b
友人関係について	1.80	1.40	2.80	147.58**	c>a>b
異性・恋愛に関すること	1.98	1.33	2.69	130.78**	c>a>b
バイトに関すること	1.37	1.94	2.70	126.63**	c>b>a
サークルに関すること	1.18	1.94	2.87	203.50**	c>b>a
家族に関すること	2.07	1.36	2.57	105.92**	c>a>b
全体	1.73	1.52	2.73	162.21**	c>a>b
<学習面>					
授業に関すること	1.08	2.07	2.85	224.66**	c>b>a
試験に関すること	1.06	2.07	2.87	235.44**	c>b>a
自分の能力に関すること	1.70	1.53	2.70	129.85**	c>a, b
全体	1.28	1.89	2.83	224.25**	c>b>a
<進路面>					
進路や将来に関すること	1.22	1.88	2.90	203.88**	c>b>a
自分が選んだ道について	1.45	1.72	2.83	152.71**	c>b>a
全体	1.33	1.80	2.87	195.06**	c>b>a
<健康面>					
体調に関すること	2.51	2.13	1.36	97.49**	a>b>c
睡眠に関すること	2.54	1.89	1.56	70.41**	a>b>c
身体に関すること	2.54	1.88	1.58	69.14**	a>b>c
全体	2.53	1.97	1.50	88.55**	a>b>c
<日常生活面>					
金銭に関すること	1.53	1.91	2.56	77.87**	c>b>a
1人暮らしに関すること	1.43	2.03	2.54	88.07**	c>b>a
時間の使い方に関すること	1.61	1.60	2.77	130.40**	c>a, b
全体	1.52	1.85	2.63	107.37**	c>b>a

注) \*\*p&lt;.01

『カウンセリング・ルーム』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで『学生相談室』、『保健管理センター』であった。「バイト」、「サークル」に関する問題では、『学生相談室』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで、『学生相談室』、『保健管理センター』の順位であった。「心理・社会面」全体では、『カウンセリング・ルーム』、『学生相談室』、『保健管理センター』の順位であった。

### 「学習面」について

分析の結果、学生相談機関の名称の間で被援助志向性の平均順位に有意な差が認められた。多重比較の結果、「授業」、「試験」に関する問題では、『学生相談室』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』の順位であった。「自分の能力」に関する問題では、『カウンセリ

ング・ルーム』と『学生相談室』への被援助志向性の方が『保健管理センター』への被援助志向性より順位が高かった。「学習面」全体では、『学生相談室』、『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』の順位で被援助志向性が高かった。

### 「進路面」について

分析の結果、学生相談機関の名称の間で被援助志向性の平均順位に有意な差が認められた。多重比較の結果、「進路・将来」、「自分が選んだ道」、そして「進路面」全体に関する問題、全てにおいて、『学生相談室』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』の順位であった。

### 「健康面」について

分析の結果、学生相談機関の名称の間で被援助志向性の平均順位に有意な差が認められた。多重比較の結果、「体調」、「睡眠」、「身体」そして「健康面」全体に関する問題において、『保健管理センター』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで『カウンセリング・ルーム』、『学生相談室』の順位であった。

### 「日常生活面」について

分析の結果、学生相談機関の名称の間で被援助志向性の平均順位に有意な差が認められた。多重比較の結果、「金銭」と「一人暮らし」に関する問題では、『学生相談室』への被援助志向性の順位が最も高く、ついで『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』の順位であった。「時間の使い方」に関する問題では、『カウンセリング・ルーム』と『学生相談室』の被援助志向性の方が『保健管理センター』より順位が高かった。「日常生活面」全体では、『学生

相談室』、『カウンセリング・ルーム』、『保健管理センター』の順位で被援助志向性が高かった。

## 考 察

本研究では、大学生の被援助志向性と学生相談機関の名称との関連を明らかにすることを目的とし、3つの学生相談機関名を取り上げ、5領域、17項目の問題についての学生相談機関への被援助志向性を比較した。以下に、本研究で得られた結果について考察したい。

### 1. 3つの学生相談機関の名称に対する被援助志向性の特徴

問題領域ごとに、3つの学生相談機関の名称に対する被援助志向性を検討した結果、「学習面」・「進路面」・「日常生活面」では『学生相談室』への被援助志向性をもっとも高かった。藤原（1998）は、大学は高等教育機関であるので学生相談は修学問題を中軸にした教育的な援助システムとして構築する必要がある、そうすることで、学生相談も大学教育の一環としての学生援助活動として規定され、学生にも学生相談は自然で利用しやすい窓口システムとなると指摘している。本研究の結果は、この指摘を支持するものであり、大学生は学業や進路などの教育面に関する問題では学生相談室を利用することが適切であると認識しており、学生相談室を利用しやすいことが明らかとなった。

「心理・社会面」では『カウンセリング・ルーム』への被援助志向性をもっとも高く、学生にとって『カウンセリング・ルーム』は自分の性格や対人関係など内面的な問題を抱えた場合に相談するところであると認識されていることが明らかとなった。櫻井・有田（1994）は大学の学生相談センターに関するイメージをSD法によって測定し、その結果、大学生は『カウ

ンセリング』の名称と被援助志向性との関連について

『カウンセリング』に対して、心理治療というイメージを抱いていると指摘している。したがって、大学生は『カウンセリング・ルーム』に対しても、『カウンセリング』というイメージを基に、個人の心理的・内面的な問題を治療する相談機関と捉えていると考えられ、そのために「心理・社会面」の問題では被援助志向性が高かったと解釈することができる。

「健康面」の問題に関しては『保健管理センター』への被援助志向性が最も高く、その他の問題領域においては『保健管理センター』は他の相談機関の名称と比べてもっとも被援助志向性が低かった。したがって、大学生は『保健管理センター』を「健康面」に関する問題を相談する場所と認識していることが明らかとなった。これは、小・中・高校における保健室のイメージが影響している可能性が考えられる。また、保健管理センターの役割が大学の保健管理であることから考えると、相談機関側と学生側の相談機関の機能や役割に関する認識は一致しているといえ、「健康面」の問題に関しては、学生にとって『保健管理センター』は利用しやすい相談機関であるといえる。しかし、『保健管理センター』は他の問題領域では大学生の被援助志向性は低かった。鶴（1998）は、保健管理センターの機能が従来の健康の診断や疾病・障害の予防といった機能に加え、学生の成長援助機能と教育研究機能への重要視といった変化が起こっていると指摘している。そのような機能の変化や拡大に伴い、提供するサービスの内容も変化していくのならば、そのことを利用者である学生に伝え、認識を共有すること、また、相談機関の機能やサービスを反映した名称をつけることが被援助志向性の観点から重要であるといえる。つまり、そうすることで、学生相談機関側の認識と利用者である学生側との認識のギャップが縮まり、学生にとってより利用しやす



い機関になると考えられる。

## 2. 被援助志向性の観点からの学生相談機関の名称の命名についての提言

以上のように、学生相談機関の名称によって、学生の被援助志向性が異なることが明らかとなった。したがって、サービスを提供する学生相談機関側は、学生の被援助志向性を考慮した上での相談機関の命名と援助サービスの提供が望まれる。学生相談学会特別委員会の2003年度の調査によれば、大学の学生相談機関の設置率は52.3%であり、1997年度に比べ設置率の増加が指摘され（学生相談学会特別委員会，2004）、今後もこの傾向が続くと予測される。また、学生相談の機能や提供するサービス内容の変化に伴う相談機関名の変更も検討されるべきであろう。そこで、本研究から得られた結果を基に、大学生の学生相談機関への被援助志向性に基づいた学生相談機関名の命名について提言したい。

まず、ひとつの大学において、複数の相談機関を有することが可能ならば、「健康面」の問題で被援助志向性が高かった『保健管理センター』と、「心理・社会面」の問題で被援助志向性が高かった『カウンセリング・ルーム』、「学習面」・「進路面」・「日常生活面」で被援助志向性が高かった『学生相談室』の名称で3機関を設置することが有効であると考えられる。なぜなら、大学生の被援助志向性の観点から、学生はそれぞれの抱える問題によって、その問題を相談するに適切であると考えられる相談機関は異なるので、それぞれの問題領域で被援助志向性が高かった相談機関を設置することで、学生は相談機関を使い分け利用することができるからである。

一方、ひとつの大学にひとつの相談機関のみの設置であるならば、全ての問題領域で1番目か2番目に選択され、学生の被援助志向性が高

かった『カウンセリング・ルーム』の名称が有効であると考えられる。しかし、『学生相談室』と『保健管理センター』は、それぞれ、教育面と健康面の問題に関して学生の被援助志向性が高かった。したがって、『学生相談室』または『保健管理センター』での名称の場合、まずは学生が利用しやすい問題での相談機関の利用を目指すことが望まれる。さらに、それぞれの学生相談機関の機能や提供するサービスについて学生に対して積極的に情報提供を行い、学生が相談機関に対して正確な情報と認識が得られるようにすることが大切であるといえる。そうすることで、他の問題領域やサービス内容についても学生の被援助志向性が高まることが期待される。

## 3. 本研究の問題点と課題

最後に本研究の問題点と課題について述べる。

第1点目は研究結果の一般化についてである。本研究ではひとつの大学の学生を対象に調査を実施した。対象となった大学には学生相談機関として『学生相談室』のみが存在するため、存在しない『カウンセリング・ルーム』・『保健管理センター』とでは学生の3つの相談機関名に対する情報量や認識に差があると考えられる。したがって、異なる名称の学生相談機関を有する複数の大学を対象に調査することで、より一般化された結論を導くことができるだろう。この点については今後の課題である。

第2点目は学生相談機関の情報提供が被援助志向性に与える影響についてである。本研究では相談機関の名称が被援助志向性に与える影響を検討した。しかし、学生相談機関への被援助志向性は学生相談機関の名称だけでなく、相談機関側からの広報活動やオリエンテーションなどを通じた情報提供によって変化していくことも予想される。例えば、伊藤（2004）は大学生

の学生相談室へのイメージと利用意図との関連を検討し、学生相談室に対して「学生生活をさまざまな面で支援する役に立つところ」というイメージを持つことが学生相談の利用意図に正の影響を及ぼしていると指摘している。また、木村・水野（2004）は学生相談の認知度が高い学生のほうが学生相談への被援助志向性が高いと指摘している。このような学生相談室のイメージや認知度は情報提供を通して変容可能な要因と考えられる。したがって、学生相談機関による情報提供が学生の学生相談室に対するイメージや認知度、さらに被援助志向性に与える効果について、今後実証的な研究が望まれる。

#### 引用文献

- Brown, M. T., & Chambers, M. 1986 Student and faculty perceptions of counseling centers: What's in a name? *Journal of Counseling Psychology*, **33**, 155-158.
- 藤原勝紀 1998 学生相談の大学における位置と役割—これからの学生相談像を求めて 河合隼雄・藤原勝紀（編）学生相談と心理臨床 金子書房 Pp.11-21.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 伊藤直樹 2004 学生相談室イメージ及び周知度と利用意思の関係—2大学における調査結果の

学生相談機関の名称と被援助志向性との関連について

- 比較検討 日本学生相談学会第22回大会発表論文集, 148-149.
- 木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, **37**, 260-269.
- Kohlman, R. G. 1973 Student feeling about names for a counseling services. *Journal of Counseling Psychology*, **20**, 386-387.
- 日本学生相談学会特別委員会 2001 2000年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究, **22**, 176-221.
- 日本学生相談学会特別委員会 2004 2003年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究, **24**, 269-304.
- 櫻井信也・有田モト子 1994 SD法による学生相談センターに関するイメージの測定 学生相談研究, **15**, 10-17.
- Sieveking, N. A., & Chappell, J. E. 1970 Reactions to the name "Counseling Center" and "Psychological Center". *Journal of Counseling Psychology*, **20**, 386-387.
- 鶴光代 1998 保健管理センターにおける心理臨床活動 河合隼雄・藤原勝紀（編）学生相談と心理臨床 金子書房 Pp.38-46.

#### 付 記

本研究は日本カウンセリング学会第37回大会で発表された。